

美術館来館者の疲労感と座り空間利用に関する研究

17RA128 増田 郁恵
指導教員 大原一興 教授 藤岡泰寛 准教授

1. 研究の背景・目的

1-1. 研究の背景

高齢社会を迎え、美術館の利用者にも高齢者が増えてきている。一方、近年の日本の展覧会では作品数が膨大に増え最後まで集中して観覧することが出来ない、大規模展覧会の誘致による大混雑で疲れ果ててしまい満足に美術に触れる体験ができない、といった状況が生まれている。特に肉体の衰えの始まっている高齢者にとっては現状の美術館展覧会の空間は十分に美術に親しむ場所とは言いがたい。高齢者に限らずこの現象は昔から存在しており、「博物館疲労」と呼ばれている。

1-2. 博物館疲労の定義・種類

博物館疲労 (Museum Fatigue : 以下 MF) という言葉は 1916 年に B.Gilman^{*1} の来館者調査に関する報告書において初めて使われ、「展覧会を鑑賞する際に時間の経過とともに 1 作品に対する鑑賞時間が減少していく現象」として定義された。

MF の種類の分類として、本研究においては Bitgood(2015)^{*2} が挙げた 6 種類とそれらの相互作用を採用し、①②⑤について調査した (表 1 参照)。

表 1 博物館疲労の種類とその原因

	来館者属性			環境条件		
	身体能力	認知能力	美術趣向の強さ	展示動線距離	展示作品数	閉塞感
①急性身体疲労	●			●	●	
②急性精神疲労		●	●			●
③展示作品の飽和状態		●			●	●
④展示情報過多		●	●		●	
⑤認知負荷		●	●			
⑥展示とキャプションの競合	●				●	

1-3. 研究の目的

本研究では美術館における MF の発現傾向を示す来館者属性を明らかにし、座り空間の利用実態から疲労を感じる来館者の座り傾向を分析することで美術館における疲労感を考慮した座り空間計画の指針を得ることを目的とする。

2. 調査概要

2-1. 調査方法

まず展示計画に関わる学芸員 6 名に対し展示計画における椅子の配置の考え方等についてヒアリングを行った。次いで、横浜美術館 (以下 YH) 並びに横須賀美術館 (以下 YS) において出口でのアンケート調査 (疲労度や椅子の必要性など)・座り場所ヒアリング (座り行為の実態と座りたい場所の希望等を図面にプロットするなど)・観覧動線内椅子観察調査 (行為の実態) を行った。美術館におけるアンケート回収数・ヒアリング回答数については表 2 に示す。

表 2 アンケート・ヒアリング回答数

調査対象館	横浜美術館	横須賀美術館
調査期間	2018 年 11 月 30 日~12 月 7 日 (休館日の 12 月 4 日を除く)	2018 年 12 月 14 日~16 日、21 日~23 日
総来館者数 (人)	5182	1225
アンケート回収数 (部)	486 (うち有効回答数 485)	139 (うち有効回答数 139)
回収率 (%)	9.4	11.3
座り場所ヒアリング回答数 (部)	228	78
座り場所ヒアリング回答率 (%)	4.4	6.4

2-2. 調査対象館と選定理由

博物館の種類の中でも美術館においては、ハンズオン展示などの参加型展示を行うことが難しく、MF を発生させやすいと考えられるため、本研究では美術館を対象とする。

YH・YS はともに近現代美術を主とした神奈川県内の公立美術館である。選定においては利用者層の違いが大きく出ないこと、館の規模に差があること、平面作品の展示を主としていることを重視した。アンケートの基本属性の抽出から来館者の年代構成はほぼ一致し、60 代以上のシニア層が約 20% を占めている。各館の基本条件を表 3 に示す。

表 3 各館の基本情報

調査対象館	横浜美術館	横須賀美術館
建築面積	9,621.41 m ²	4,234.42 m ²
延床面積	26,829.40 m ²	12,095.15 m ²
アクセス	駅から徒歩 5 分以内	車/最寄駅からバスで 10 分

Study on museum fatigue and the utilization of sitting space in museums of fine art
Ikue MASUDA (Supervisor: Prof. Kazuoki OHARA, Assoc Prof. Yasuhiro FUJIOKA)
KeyWords: museum fatigue, sitting space, visitor study, museum of fine art

なお、今回実施した調査においては冬季の展覧会であるため夏季と比べ来館者数が少なく、混雑による影響をほぼ受けない状況で調査を実施した。

3. 展示計画における座り空間の決定と疲労感の考慮

3-1. 展示計画の手順と座り空間決定

展示計画にかかわる学芸員へのヒアリングの結果からわかった展示計画の手順と座り空間の計画のタイミングを図1に示す。座り空間の計画は展示計画の最後に行われることが多く、作品配置後の空間的余裕に左右されている。空間的余裕の基準として車いすの通れる道幅を確保できているかどうか、一般観覧者の動線を妨げていないか、作品の引きを確保できているかどうかの3つに集約される。椅子を配置しない場所として、大規模の展覧会で動員数が過多になると見込まれる場合、その前に長時間居たくないと思われる作品がある場合、大規模の作品を引きで見せる場合等が挙げられた。

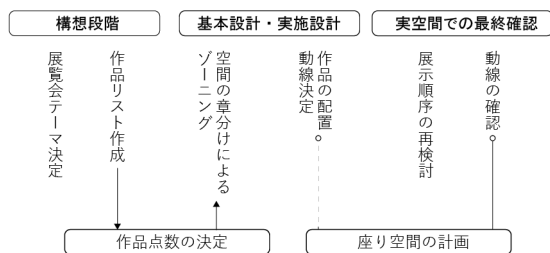


図1 展示計画の順序

3-2. 展示計画における疲労度の考慮

学芸員の考える博物館疲労の原因については、来館者の高齢化、館そのものの照明環境といった館の持つ環境条件の問題に加え、作品の点数が考えられるという意見であった。館の規模・展覧会のテーマとなる作品の大きさによって作品点数の最適数は異なるため、学芸員のこれまでの経験によって作品点数の調整が行われている。

疲労度の解消の手立てとして考えられると回答を得たものを表4に示す（下線付きは現在講じられているものを示す）。展示途中での飽きを解消するためにインパクトのある作品や展示ストーリーの中でクライマックスを設けるようにするといった工夫が見られた。中でも比較的自然光を多く取り入れているYSでは来館者が疲れるかどうかを考慮したことがほとんどなく、その一因として館の環境が手助けしているのではないかと考えた意見が得られた。

表4 来館者の疲労感を解消する手立て

作品展示による解法	建築・環境条件による解法	館運営方法による解法
<ul style="list-style-type: none"> ・展示作品の内容による緩和 ・作品点数を適正数に抑える ・展示解説文のデザイン ・展示観覧動線内に不快な空間を作らない 	<ul style="list-style-type: none"> ・壁・床の素材・構造 ・照明環境 ・椅子の選定・配置 ・喫茶室、ラウンジといった休憩室を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の興味関心に従って動くことのできる場づくり・体験づくり

4. 来館者属性と博物館疲労の発現

1-2. における①を主観的身体疲労(PFF)、②を主観的精神疲労(PMF)⑤を集中力の度合い(CF)としてアンケート項目を設定し回答を求めた結果をそれぞれについて数量化I類を用いて分析した。

4-1. 主観的身体疲労(PFF)による分析

YHにおいてPFFが高い属性は高齢の初めてもしくは2回目の来館者、一方でPFFが低い属性は若年の来館者であるとわかる。観覧した展示種類が常設展のみの場合にはPFFが高くなりやすいが、これは常設展のみの展示観覧の場合にはより自由度の高い観覧を行っているためではないかと考えられる。

YSにおいてPFFが高い属性は初めて来館した層であることがわかる。複数人での来館者も例数が少ないがPFFが低く表れている。YSでは年代層による影響は大きくない。なお、YH同様常設展のみの観覧の場合にはPFFが高くなりやすく、その理由として動線距離が最も短いこと、またYSの常設展は回廊型になっており動線の方向性がわかりやすく定まっているためではないかと考えられる。

4-2. 主観的精神疲労(PMF)による分析

YHにおいてPMFが高い属性に傾向は見られない。一方でPMFが低い属性は若年であり一人で来館する来館者であるとわかる。YSにおいてPMFが高い属性は若年であり初めて来館する来館者であるとわかる。一方でPMFが低い属性は中年であり2回以上の来館や6回以上のリピーターであるとわかった。

両館での来館回数の影響値の違いの理由として、YHでは展覧会の設計において壁面色の変更等を積極的に行っているため、来館するたびに展示環境の変化が大きく来館者の館環境への慣れが発生しにくく、YSでは館の構成・環境に慣れたことで観覧中の心理的負荷が少なくなるのではないかと考えられる。

4-3. 集中力の度合い(CF)による分析

YHにおいてCFが低い属性は中年層の複合観覧を行う層であることがわかる。またこの層は作品をやや

者のヒアリングより、身体的なコンディションが悪い来館者が展示序盤から座り行為を行い、複数回椅子を利用していることが明らかになった。座り回数の多い来館者ほど序盤の休息行為を要求しており、展示序盤であっても座り空間を計画する必要があるといえる。

5-2. 各座り空間利用者における博物館疲労の発現

PPFが高い来館者が利用する座り空間は「展示室内」にある「展示観覧動線と1面で接している」場所であり、これらの場所では5分以下の短い着席が特に多く、荷物整理など椅子付近に立ち止まってわずかな時間利用するという傾向が観察された。PPFの低い来館者が利用する座り空間は「大空間に面している」座り空間であるとわかる。いずれも休むために利用した来館者が多く、主観的身体疲労の高い座り空間では休む以外の選択肢を選んだ割合が少ない。

PMFが高い来館者は、「展示室外」にあり「展示観覧動線から離れた」座り空間を利用しており、観察調査においてこの場所の利用者は高齢者が多く見受けられた。一方でPMFが低い来館者の利用する座り空間に共通項は見受けられない。また、PMFの度合いによって座り理由に違いが見られた。PMFが高い来館者が多く座る座り空間では休むと同時にカタログを見るという動作を行っている割合が50%にのぼり、その理由として展示観覧に加えてカタログを見ることで単調な観覧に一種の気分転換を図っているのではないだろうか。PMFの低い来館者が多く座る座り空間においてはカタログを見る割合は30%程度にとどまっており、作品を見るために座った割合が約35%と多くなっている。

CFが低い来館者の利用した座り空間には空間特性に共通項がなく、来館者の属性によって左右されると考えられる。CFが高い来館者の利用した座り空間は「展示空間外」であり、「作品と接していない」場所であり、これらの空間では展示カタログを起点とした会話の発生や、携帯電話の利用といった展示観覧とは関係のない行動を気兼ねなく行っている来館者が見受けられた。

6. まとめ

本研究により、MFへの来館者の属性の影響は館の性質によって異なる発現をすることが分かった。総動

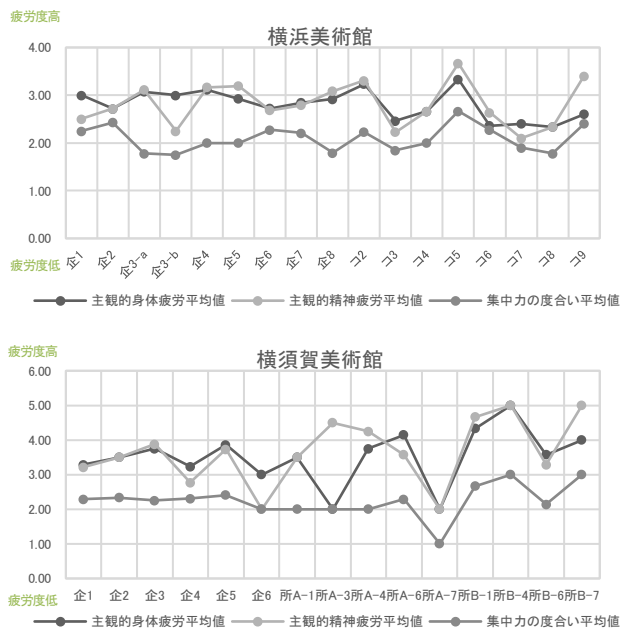


図4 座り空間別の各疲労感の平均値

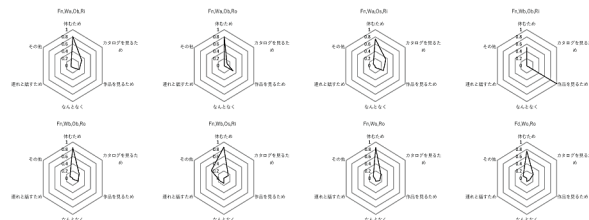


図5 座り空間の分類別の座り理由

線距離が1kmに近づく館では年代問わず博物館疲労の発現の傾向が一致する一方で、今回調査したYSのような中規模館、かつ観覧動線の判別がやや困難な美術館においては来館者が館の環境に慣れているかどうか、また年代が博物館疲労と大きく関係している結果となった。利用者数が多い座り空間は展示室外に配置された作品と接しない空間であり、かつ初回の座り空間利用が起こりやすいと考えられるのは150m前後、作品点数100点程度の位置にある座り空間である。また利用時間が長い座り空間は展覧会中盤に配置されており、展覧会中盤に他者の観覧を妨げない休憩空間が計画される必要があるだろう。また、PPFの蓄積が展示動線内での座り行為を誘発しており、PMFの蓄積により、展示観覧以外の刺激を要求しているのではないかと考えられることから、今後の座り空間の計画において対象となる疲労感とふさわしい休憩空間を考慮することが重要である。

謝辞：本研究において、ヒアリング調査を行わせていただいた学芸員の皆様、来館者調査を行わせていただいた横浜美術館・横須賀美術館の学芸員並びに館スタッフの皆様のご厚意に感謝いたします。

【参考文献】

1. B.Gilman(1916):Museum Fatigue, Scientific Monthly,p67-74
2. Stephen Bitgood(2015) : Museum fatigue and related phenomena.IVA InterpNews,4(6),p25-29